

家庭科教育における被服領域の現状と動向
—被服製作の実態と意識—

三輪聖子*, 辻 泰子*, 夫馬佳代子**, 西村敬子***

*家政学部家政学科家政学専攻 **岐阜大学 ***愛知教育大学

(2000年9月14日受理)

Current State and Trends of Clothing Area in Home Economics Education
—Realities and Considerations of Dressmaking—*Department of Home Economics, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University

**Gifu University

***Aichi University of Education

MIWA Satoko*, TUJI Yasuko*, FUMA Kayoko** and NISHIMURA Keiko***

(Received September 14, 2000)

緒言

家庭科はわたしたちの生活に最も密着した教科であり、指導内容は社会変化の影響を受けることが多い。現代社会の衣生活領域において「被服選択能力は必要」だが、「被服製作の技術的能力は必要ない」という意見がみられ、被服領域における製作的な技術の削減が実施されてきた。しかし、日本家庭科教育学会実施『小・中・高等学校家庭科の新構想研究—資料編—』(1996)¹⁾の報告書では「必修家庭科を学習した生徒の受容と課題」の項目に家庭科でもっと学習したい内容として「実際の生活に役立つような裁縫、調理、栄養など」「一人暮らしを上手にこなしていける方法」などが挙げられており、生徒からの要望として被服製作が挙げられている。

一方、文部省は小・中学校の新学習指導要領を1998年12月14日に告示し、小学校家庭科では「ほころび直し」を、中学校技術・家庭科では「手芸」を削除項目としてあげている。高等学校における新学習指導要領は、1999年

3月29日に告示された。しかし、改訂後の被服製作の内容は「家族の生活と健康」「生活の科学と文化」といった項目の一部として扱われ削減されることになった。

このような状況において、被服領域の研究動向をとらえると、教材研究、教材開発に関する研究は多いとはいえないのが現状であろう。

本調査では、小・中・高等学校の被服領域における被服製作の現状を明らかにすることによって、被服製作の取り扱われ方と問題点を指摘し、今後の家庭科教育における被服製作のあり方や教材研究・開発に向けての指針を探ることを目的とする。そこで高等学校において男女選択必修で家庭科を学んできた大学生の被服製作に関する実態と意識調査を実施した。さらに、平成元年の学習指導要領改訂以前に家庭科を学んだ大学生を対象とした被服領域に対する実態調査結果との比較を行い、家庭科教育の現状と生徒の意識の関わりを明確にした。

方 法

1. 調査対象及び時期

調査対象者は愛知県A大学、岐阜県B大学、岐阜県C大学の1年生497名であり、うち女子385名、男子112名であった。また、192名は現在大学で家政学を専攻しており305名はその他を専攻している。回答者のうち高等学校で学んだ教科は「家庭一般」404名、「生活一般」66名、「生活技術」11名という状況であった。調査時期は1998年5月～10月である。

2. 調査内容

調査内容は①被服領域に興味ある内容、②小・中・高等学校時代に製作した作品、③製作物の活用状況、④被服実習に対する不満な点や意見についての自由記述である。

3. 調査方法

調査は無記名式質問紙法を用い、具体的な現状を詳細に把握するため、選択方式ではなく自由記述を中心に実施した。なお調査票は各大学の先生方に依頼して配布留め置き調査とし、回収率は100%であった。

結果及び考察

1. 家庭科に対する興味

家庭科に対する興味は「まあまあ好き」という回答が約70%を占めており「大好き」「好きではない」という回答がほぼ同じ割合で約15%を占めていることがわかった(図1)。

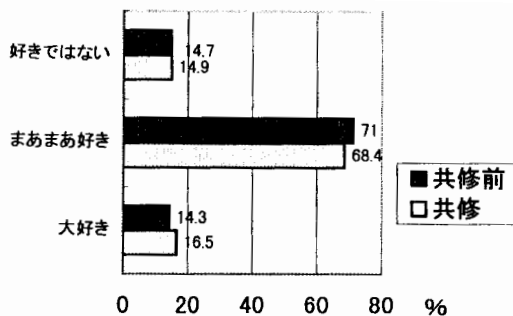


図1 家庭科への興味

この回答は共修以前とほぼ同様であり、家庭科に対して否定的意見は少ないと考えられる。

家庭科で興味ある領域は、図2に示すように1位「食物」46.3%、2位「被服」24.3%、3位「保育」15.0%であった。共修以前の1位「食物」47.4%、2位「被服」32.5%、3位「保育」8.3%と比較すると、順位に変化は認められないものの興味が「被服」から「保育」に移行していることがわかる。これは被服領域内容の減少と保育領域内容の拡大に影響を受けて学校で実際に学んできたことにより興味を持ったことが影響しているのではないかと考えられる。

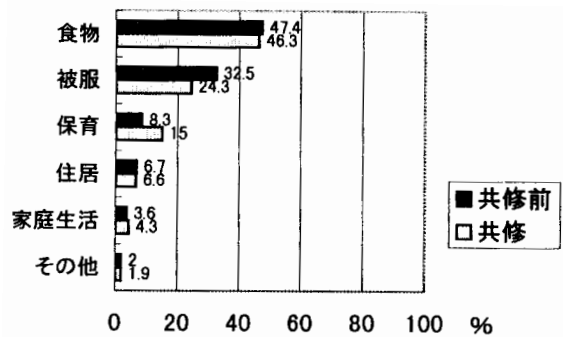


図2 興味ある領域

図3は被服領域における興味ある内容を示したものである。「作品の製作」をあげている人が43.5%と最も多く、次いで「布地の特徴」5.8%、「ミシンの使用」4.8%であった。これを男女別で見ると、女子は1位「作品の製作」91.3%、2位「布地の特徴」13.7%、3位「繊維の性質」10.3%であり、男子は1位「作品の製作」65.8%、2位「ミシンの使用」18.2%、3位「製作の基本」12.5%であった(図4)。男女共に1位は「作品の製作」をあげているが差は大きい。男子は次に「ミシンの使用」をあげメカニク的な所に興味があると考えられる。

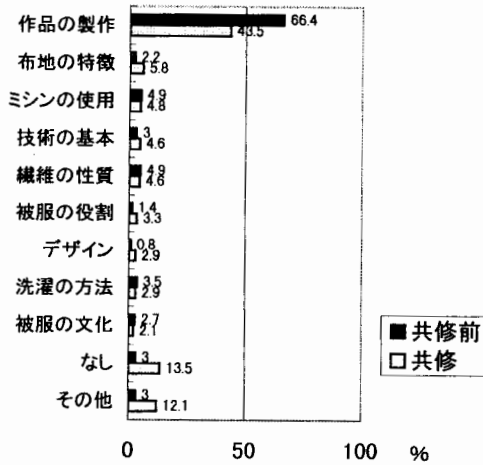


図3 被服領域における興味

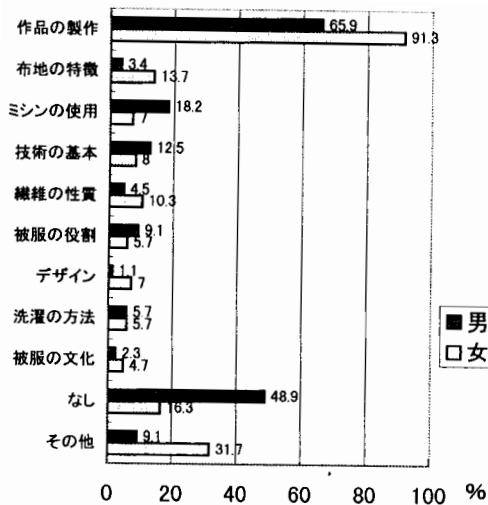


図4 興味ある内容 (男女別)

共修以前と比較すると、依然として「作品の製作」への興味は高いが割合は減少しており、それに対し「布地の特徴」「被服の役割」「デザイン」が上昇している。男女共修になり男子が家庭科の授業を履修するようになったこと、被服製作に費やす時間が減少したこと等により興味ある領域や内容が変化してきたのではないかと考えられる。被服製作に費

やす時間の減少と「布地の特徴」「被服の役割」「デザイン」に費やす時間の増加が影響を与えていると思われる。つまり授業に費やす時間数と興味・関心は大きく関連があると考えられる。

2. 被服製作の教材

1) 製作作品

小・中・高等学校で製作した作品は表1に示すとおりである。小学校では以前より男女共修であったため内容に変化はなかったが、共修以前とは「リュック」「袋」の順位が変わっていることから、時代の変化に伴い単なる袋作りから活用目的が明確な袋作りへと変化していることがわかる。

表1 製作作品

順位	教材名	小学校		中学校		高等学校	
		共修	以前	共修	以前	共修	以前
1	エプロン	45.6	41.2	16.2	6.9	32.5	12.3
2	リュック	17.8	5.8				
3	袋	9.4	18.8	4.0	1.6		
4	雑巾	4.9	1.9				
5	クッション	4.3	1.9	2.3	1.0		
2	ショートパンツ			14.1	3.6	8.5	5.5
3	パジャマ			12.1	31.1	0.9	3.0
4	パーカー			9.9	0.4	1.8	9.9
9	スカート			3.3	23.2	3.3	9.9
10	スモック			2.9	18.8		
2	はんでん					9.8	2.1
4	浴衣					6.6	2.1
6	小物	3.7	4.5	2.7	0.6	4.4	1.3

中学校では平成元年学習指導要領改訂以前の主流教材であった「パジャマ」「スカート」「スモック」が改訂後は「エプロン」「ショートパンツ」「パーカー」など男女共に活用できる教材に変化したことが明確にあらわれている。教科書に掲載されている教材の影響が大きいと考えられる。また、「パジャマ」は改訂以前の教材の中では最も実践された割合が高い教材であり、男女共に取り組める教材ではあるが技術面、授業時間数の面から減少したと考えられる。

高等学校でも中学校同様、男女共に活用で

きる教材に主流が変化していることがわかる。また、高等学校の教材は「エプロン」「ショートパンツ」などの洋裁に関するものから「はんでん」「浴衣」などの和裁に関するものまで教材の多様化が見られる。

製作した作品の活用状況は、現在でも使用している作品が「ある」と答えた人は54.5%、「ない」と回答した人は31.0%であり、半数以上が製作した作品を何か1つは現在でも使用していることがわかる。

現在でも使用している作品で最も多かったものは、「エプロン」16.5%、次いで「パジャマ」6.3%であり(図5)、生活の中で活用できなかった作品で最も多かったものも「エプロン」12.4%、次いで「ショートパンツ」8.9%であった(図6)。「作ってよかった」と感じる作品で最も多かったものは「エプロン」25.8%、次いで「小物」8.0%であった(図7)。「エプロン」は小学校から高等学校を通して最も多くの人が製作した作品であるため多くの人が使用し、「作ってよかった」と感じた作品になったと考えられ、逆に活用できない作品の上位にもなっていると考えられる。なお性差は見られなかった。

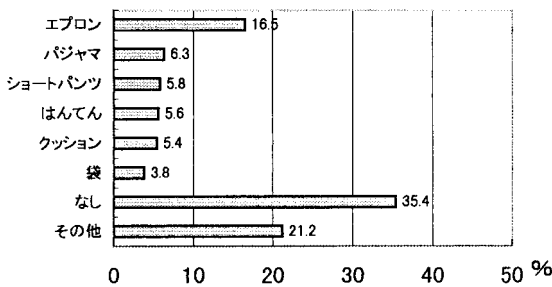


図5 現在でも使用している作品

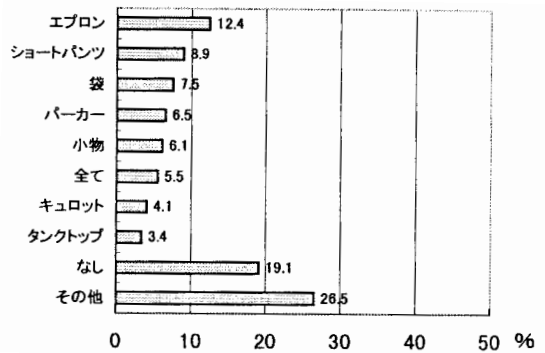


図6 生活の中で活用できなかった作品

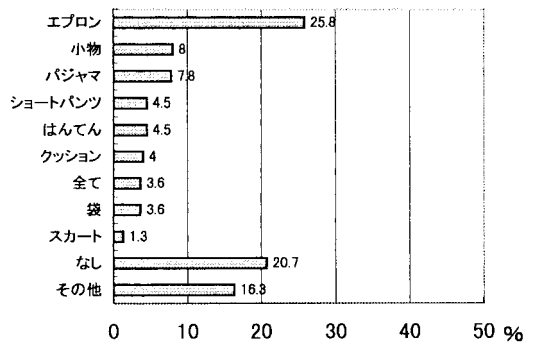


図7 「作って良かった」と感じた作品

製作が困難であった作品を男女別にみると、図8に示すとおり女子の1位は「ショートパンツ」19.2%、2位が「パジャマ」17.4%、3位「パーカー」12.5%であり、男子の1位は「エプロン」22.1%、2位が「ショートパンツ」11.6%、3位「はんでん」9.3%であった。

次に製作が簡単であると感じた作品を男女別にみると、図9のように女子の1位は「エプロン」、2位は「袋類」、3位は「小物類」であり、男子の1位は「エプロン」、2位は「小物類」、3位は「袋類」であった。

簡単であると感じた作品には男女差が認められないが、困難であった作品には差が見られる。これは技術力による違いではないかと考えられる。

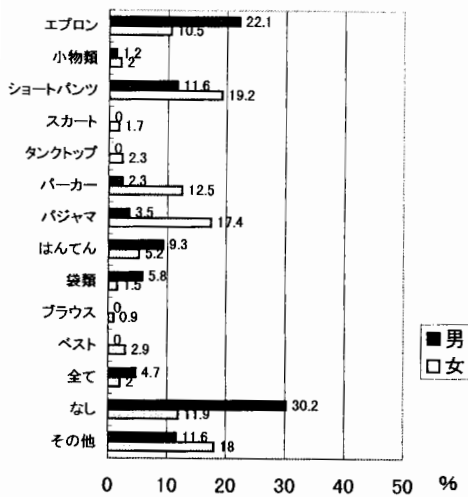


図8 製作が困難であった作品

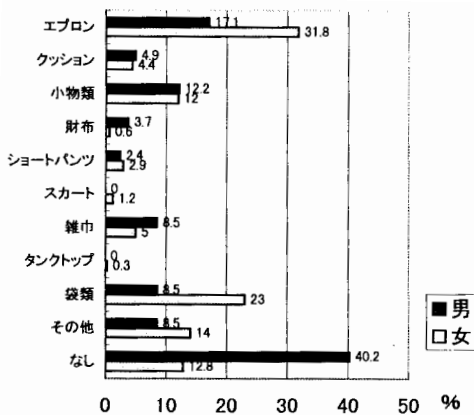


図9 制作が簡単と感じた作品

2) エプロン教材の実態

エプロン教材について全体の96.0%が「エプロンを製作したことがある」と回答しており、約72%の人が小学校でエプロンを製作していることがわかる。エプロンに用いる布の用意は、約73%が学校であり、時間内に完成したかどうかという質問では約71%が時間内に完成している。作ったエプロンを使用したかという質問では約72%の人が使用したと答えており、約50%の人がエプロンを作ってよかつ

たと感じると回答している。しかし、エプロンが時間内に完成しなかった人が全体の2割近く存在した。完成しなかった人への対応は問わなかったため今後明確にする必要がある。エプロンを使用した人や時間内にできた人は「作ってよかった」と感じている割合が多く、使用していない人や時間内にできなかった人は「作ってよかった」と感じない割合が高い。エプロンの製作過程で難しいと感じた所は「ミシンの使用」が最も多かった。ミシンがうまく使用できなかった人は時間内にエプロンができあがらなかった割合が高い。

エプロンは小・中・高等学校を通して多くの生徒が製作した作品であり、性別に関係なく家や学校で使用可能な簡単にできる教材の1つであるが、小・中・高等学校で繰り返し作ることの意味はあるのだろうか。全ての生徒が共通作品を製作するという経験は必要であると考えられるが、子どもの成長・発達過程で、同一教材を繰り返す必要性はどの程度あるのであろうか。確かに同一教材を何度も製作することにより技術の向上は、認められるものの、どの段階でどのようなエプロンを製作させるのが最も適しているか検討する必要がある。今後、新学習指導要領を考慮し、新たな教材開発が課題となろう。

3. 被服製作の実習に対する不満

1) 授業内容に関すること

授業内容に関して最も多かった不満点は「被服実習の時間が足りない」(43人)、次いで「人数が多くて先生に聞きたいときにすぐ聞けなかった」(17人)であった。この他に「わからないまま進んでいった」「個人のペースにあった指導をしてほしい」など教師の指導に対する要望も多く見られた。時間不足や40人に1人の教師といった制度上の問題は、他教科にも共通することであるといえる。

2) 設備に関すること

設備に関することについて最も多く見られた不満点は「ミシンの台数が少ない」(115人)、次いで「ミシンの調子がすぐ悪くなる」(27人)であった。

3) 実習教材に関すること

実習教材に対する意見として「自分の好きなものが作れなかった」(27人)、「自分の好きなものを作れないから使えないものが増える」「個性的なものをつくれない」等の実習教材の自由化を求める意見が多かった。また、「教材の種類が少ない」「エプロンばかりでつまらない」「形が決まっているので体型に合わなかった」等の教材に対する不満も多く見られた。

4) 実習材料について

実習材料に関する意見としては、「布は自分で用意したい」「好きな布で作りたい」という学校で一律の布を配布することへの批判が多く見られる。反対に「自分で材料を用意するのが面倒くさい」という意見も少数ではあるが見られた。

5) 興味の程度に関すること

興味の程度に関する意見としては「難しくて苦手」「ミシンが苦手」「面倒」「満足感が得られない」等消極的な意見が多かった。特に「ミシンが苦手」と答えた人と「家庭科が嫌い」と答えた人の相関は強く、ミシンがうまく扱えないことが家庭科を嫌いに行っている要因の1つと考えられる。

6) その他の意見

その他の意見として「自分の不器用さ」「親に習った方がいい」という意見があった。

以上のような家庭科に対する不満を知ることの中で、特に目立つものは、ミシンに関すること、授業時間に関すること、教員の人数のこと、実習教材に関することである。授業時間は今後ますます減少することも考慮すると、まず、一人一台ミシンがいきわたるよう

に設備を充実させ、時間内にできる実習教材を多く開発し、生徒に選択させるようにするなど、少しずつでも不満を解消していく必要があるのではないだろうか。不満を取り除いていくことにより家庭科への興味が増すことにつながると考える。

4. 被服製作に対する今後の課題

被服領域における被服製作の現状から以下のような問題点と課題が明らかになった。

①生徒の家庭科に対する興味・関心は、授業に費やす時間数や教材と関連があり、実習教材が子どもに与える影響は大きいことが明らかになった。時間数削減が現実化してきている状況において、短時間で生徒に満足感を与えられる教材を開発することが課題となる。

②被服製作の教材として小・中・高等学校すべてでエプロンが取り上げられていた。すべての子どもが同一教材を製作するという経験は必要であるが、繰り返し製作する必要性は少ないと考える。どの段階でどのような意図を持ってエプロンを製作するのか検討する必要がある。

③エプロンが完成しなかったという回答が約2割存在し、使用していない人や完成しなかった人は「作ってよかった」と感じていない割合が高い。完成しなかった人への教師の対応が少なからず影響を与えていると考えられ、この問題に対する検討が必要である。

④家庭科が嫌いな生徒は、ミシンをうまく取り扱えないことが1つの要因になっていることが明らかになった。また不満の1位に「ミシンの台数が少ない」があげられていた。そこでミシンに対する設備の充実と指導の徹底が課題と考える。

要 約

本調査では、被服領域における被服製作について現在の取り扱い方と問題点を指摘す

ることを目的とした。調査結果をまとめると、性差は認められるものの、生徒は被服領域が嫌いなわけではなく、むしろ製作実習について興味があると答えている。しかし平成元年の学習指導要領改訂後は製作から被服の役割やデザインなどに興味が移行してきているのが現状である。

製作作品は、小・中・高等学校とも1位はエプロンであった。エプロンは多く製作されているので、現在最も活用され、作ってよかったと感じる作品となっている。製作が簡単であると感じた作品に性差は認められないが、困難であった作品には性差が認められた。エプロンが時間内に完成しなかった人が2割近く存在しており、ミシンがうまく使用できなかった人に多い。

被服製作の実習に対する不満は、最も多かったものは「ミシンの台数が少ない」であり「ミシンの調子が悪い」「ミシンが苦手」な

どミシンに対する不満が多く聞かれた。また教材に対して学校から一律配布に対する批判も多い。

以上のような結果からいくつかの問題点や課題が表出化してきたと考えられる。これらを踏まえて2003年に向けての新学習指導要領に対応した、新たな被服領域のあり方や被服製作に対する教材研究・開発が必要であると考える。

参考文献

- 1) 家庭科教育学会『小・中・高等学校家庭科の新構想研究—資料編—』, 45—46, 1996
- 2) 三輪聖子, 夫馬佳代子, 西村敬子『家庭科教育における「被服領域」についての現状と動向』愛知教育大学家政学教室研究紀要28号, 1997